
Angel Beats! stand by me

A B O O O !

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l B e a t s ! s t a n d b y m e

【Nコード】

N 6 3 1 5 L

【作者名】

A B O O O !

【あらすじ】

死んだ後の世界。

ここはそう呼ばれているらしい。

らしい、というのはみんな死んだ後、気付いたらここにいたから。所謂、大凡。

そして俺も。

死んだらしい。

そしてここにいた。

まず俺がここに来てどうなったか。

とりあえず死にました。

ブローグ

「……………首いた」

思わず出た言葉はとりあえずそんな事だった。
ゆっくりを目を開けば最初に感じたのは首の痛み。

どうやら寝違えたようで右の首筋が張っていた。

「痛っ！~~~~っ！！」

首を曲げようとしたら、痛すぎて右にも左にも曲がらない。

やべ、どうしよう。

痛くて動けねえ。

首を曲げないように体を起こしても立ち上がる事も出来ない。

「何をしているの？」

後ろからかかる声。

気付いた事は気付いたが悲しいかな、首が痛くて振り向けない。

「すいません。ちょ、俺の正面に回ってくれませんか？

いや、ガチで」

返事は、なし。

……何でだろう。
すごい心が痛い。

このまま俺は首が動かず怪奇の視線を浴びる事になるのだろうか。

「来た」

と、そろそろ霞んできた目にあるものが飛び込んできた。

淡泊に話す彼女はやはり態度も表情も淡泊だった。

ガラス細工のような瞳。

まるでお手本のように着こなした面白みのない制服。

白銀の髪も特に手を加えた様子もなく、一房だけ後ろで結んでいるだけ。

山吹色をしたガラスのような瞳が俺を真っ直ぐ射抜く。
恥ずかしいんですが。

「……………」

「何してんの？」

「正面に来てと言ったから来た」

これはギャグだろうか。

逸らした視線を追って彼女も移動する。

何でと聞けばこれまた淡泊な答え。

相も変わらずガラスのような瞳で俺を射抜き続けていた。

「あの……………」

「何？」

「……………」

射抜く視線とその即答が痛い！

首を傾げる彼女は俺の苦悩を理解できていないのだろう。

「何か用があるんじゃないの？」

彼女に急かされて脱線していた事に気付く。

そろそろ話を戻しておこう。

所謂、閑話休題なるもの。

「首を、曲げてください」

「首？」

彼女が再び首を傾げるのも頷ける。

いい男がいきなり首を曲げてくれときたもんだ。

敬遠もされる。

仕方ない。一から事情を……待て、ここはどこだ？

「分かった」

ところが彼女は特に気にした様子もなく俺の頭に手を添える。

顎と頭の天辺に。

……あれ、待てよ。

こんな状況映画で見た事あるぞ。

あれ、待てよ。

これってたしか首の骨を……、

ゴキンッ！！

大凡首を捻るだけでは聞こえないはずの音が聞こえた。

急激に薄れてゆく意識の中で最後に見たのは何時まで経っても一本調子で、心配の欠片もしていない彼女の瞳だった。

いや、こんな時こそ閑話休題。

彼女の瞳なんてこの際どうでもいい。

話の本末であり、俺が思わなければいけないのは、俺が彼女に殺されたという事だ。

とりあえずの邂逅

「お、目が覚めたか」

目を覚ましたら知らない天井だった。
続いて視界に割り込んでくる男。

「……誰？」

「いや、お前が誰だよ」

質問を質問で返された。

起き上がってみるとどうやら保健室だったみたいだ。

簡素なベッドが2つ、その内の一つは俺が占領しているが。
仕切りは全開で辺りがよく見える。

よく見る消毒液から得体の知れない薬品まで詰まった棚。
今月の保険便りやら健康を促すポスター。

間違っことなく保健室だ。

「で？お前は？」

尋ねられたのだから自己紹介すると思っていたのか男の眉が不機嫌そうにつり上がっていた。

俺もそれを忘れており、若干気まずい雰囲気を感じとりながら少し遅れた自己紹介をする事にした。

「穂波 次郎。よろしく」

「そうか。俺は音無だ」

俺達は熱い握手を交わし、互いに笑い合った。

と、そこで俺が何で保健室なんかにいる理由が分かった。

さっき、かは分からないが俺が女の子に首をへし折られ、危うく死にかけたからだ。

きつと音無は看病してくれたに違いない。

「そっぴやさ、音無。俺さっき殺されかけたんだよ。

こーんなちっちゃい女の子に。

映画みたいに首ゴキッ！って。

いやー、もうあれは死んだと思ったね。

思い出を走馬灯の如く見る暇もなかったね。可愛いからってあんなの許せねえよ。

一発ガツンと言ってやらないと」

笑い話で済んだがもしかしたら死んでいたかもしれないのだ。
首を曲げてほしいと頼んだのは俺だがいくら何でもやりすぎだ。

泣いて謝って俺の彼女になるまで許さない。

同意を求めるために音無を見るが、どこか気まずそうにしている。
もしかしてこいつの彼女だったりして。

「あー、その何だ。

ぶっちゃけて言つと月島、お前は既に死んでいる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315/>

Angel Beats! stand by me

2010年10月15日22時44分発行